慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小泉信三の福沢諭吉論
Sub Title	Shinzo Koizumi's discussion on Yukichi Fukuzawa
Author	小川原, 正道(Ogawara, Masamichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2020
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.93, No.5 (2020. 5) ,p.51- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20200528-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小泉信三の福沢諭吉論

小川原　正道

一　はしがき
二　「福沢諭吉伝」
三　愛国者・個人主義者
四　戦時中の福沢弁護
五　占領下の福沢論
六　戦後の福沢論
七　むすびに代えて――『福沢諭吉』（岩波新書）――

一　はしがき

小泉信三は、昭和八年（一九三三）から二十二年にいたるまでの慶應義塾長在任期間、そして戦後の文筆家時代を中心に、さかんに福沢諭吉について論じた。福沢研究において今日なお、重きを占めている石河幹明の『福沢諭吉伝』全四巻（岩波書店、昭和七年）の刊行にあたって、版元の岩波書店創業者、岩波茂雄を石河に紹介したのも小泉である。大正十二年（一九二三）六月十九日、慶應義塾評議員会は福沢諭吉の伝記編纂を決め、石河

に依嘱した。岩波書店から出版する話は岩波茂雄が八月に出願したことにはじまるが、[1] 同年十二月十一日付岩波宛書簡で小泉は、岩波と石河との面会を仲介し、石河宛紹介状を書くとしている。[2]

後年、小泉は、「私は慶應義塾に学び、塾に奉職しながら福沢先生の著作に特殊の注意を向けたのは晩かった」とした上で、この大正十二年に着手された『福沢諭吉伝』と、大正十四、十五年に刊行された『福沢全集』全十巻の刊行が、「特に吾々の注意を先生に対して促した」と述べている。小泉は、福沢のことをマアテルリンク（Maurice Maeterlinck）の「青い鳥」――幸福の象徴「青い鳥」を木こりの子どもの兄妹が求めて旅をしたが見つからず、家に帰るとその籠にいた――にたとえたが、その通り、福沢に着眼したのは遅かったのである。[3] 大正十二年というと三十五歳、欧州留学から帰国して慶應義塾大学部の教授に就任して七年が経っていた。[4]

小泉の福沢諭吉研究、小泉と福沢の比較などについては、服部禮次郎「小泉信三博士没後四〇年――小泉信三博士と福沢研究」（服部禮次郎『福沢諭吉と門下生たち』（慶應義塾大学出版会、平成二十一年〈二〇〇九〉）、神沢惣一郎「福沢諭吉と小泉信三」（『早稲田商学』第二百九号、昭和四十四年六月）、などの業績がある。服部氏が、小泉の福沢精神の解釈は戦前戦後も一貫しており、その精神の「強調の仕方、受け止め方というのは、やはり大きく変化し、深まり広がっているように思われます」と指摘している点や、[5] 神沢氏が「小泉のマルクス批判は戦前と戦後ではまったく異なった境位にあったことをわれわれはよく知っておく必要がある」と述べている点などは、[6] 本稿にとって重要である。また最近では、楠茂樹・楠美佐子『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』（ミネルヴァ書房、平成二十九年）が、小泉と福沢との関係について積極的に論じており、小泉にとって福沢が「青い鳥」であったことや、小泉が戦前、『福翁自伝』、「旧藩情」、「瘠我慢の説」を推奨したのに対し、戦後は『学問のすゝめ』を薦めたことに着眼し、「小泉信三の思想を読み解く一つの手がかりは、確かにこの点、すなわち福沢諭吉への覚醒のあり方にあるといえる」（某点原文）と指摘している点も、注目すべきであろう。[7] 果たし

て、小泉の福沢論は戦前戦後一貫していたのであろうか。マルクス主義をめぐる時代環境の変化は、小泉の福沢論に変化を与えたのであろうか。小泉はどのようにして福沢に「覚醒」したのであろうか。以下、小泉信三による福沢諭吉論を考察していきたい。

二　「福沢諭吉伝」

小泉が福沢について本格的に書いたおそらく最初のものは、小泉自身が編んだ岩波文庫の『福沢選集』（昭和三年一月）に附した解説であろう。[8] 小泉はそこで、福沢の略歴、収録されている著作の概要について述べた上で、これで福沢の代表的著作が網羅されているわけではなく、「石河幹明氏が慶應義塾において目下選述を進めつつある福沢伝とに就いて見られんことを希望する」と結論している。[9]

小泉はその石河幹明の『福沢諭吉伝』刊行にあたり、「福沢諭吉伝」と題するエッセイをまとめている。小泉は、福沢の生涯は大きく三つの事件に重大な影響を受けたという。第一は明治維新の変革、第二は明治十四年（一八八一）の政変、第三は日清戦争である。第一の点については、福沢は当初、幕府も薩長も攘夷家で頼むに足りないと感じていたが、実際には新政府は開国派で、福沢はその改革を壮とし、政府当局者が有意な人材であることを承認した。ならばなぜ政府に出仕しなかったのか。

福沢は四点理由を挙げている。第一に、役人の空威張りが気に入らないこと、第二に、役人全体の素行風儀がよろしくないこと、第三に、幕臣の寝返りが気に入らないこと、第四に、皆政府に依って立身出世をしようとするから、文明の手本をみせてやりたいと考えたこと、である。これに加えて、他人の手柄に割り込んで一口乗せてもらおうという態度の卑陋なるを卑しむ念も強かったのではないか、と小泉は推測する。

第二の明治十四年の政変では、大隈重信、伊藤博文、井上馨と約束した新聞発行が頓挫したことで迷惑をこうむっただけでなく、福沢門下生が政府から追放された。国会開設論を唱えるから福沢は危険であるというなら、それを約束した伊藤、井上の挙動も訝しいといわざるを得ない。福沢門下生が危険であり、その責が福沢にあるというのは無茶な論理である。福沢はこう考えた。

第三の日清戦争については、福沢は何より国の独立を重んじ、これを憂慮し、軍備拡張論を唱えた。明治十五年頃からその国権論は「支那」を目標とすることになり、いよいよ日清開戦を迎える。福沢は軍資金の募集を呼びかけ、その勝利を喜んだ。こうした福沢を説く事で、小泉は、「動もすれば看過せらるる愛国者としての先生」を描くことを試みた、と述べている。(10)

小泉がこの時点で、福沢の「愛国者」としての側面を強調していたことは、記憶されるべきであろう。小泉は昭和三年二月の段階でも、「瘠我慢の説」を引きながら、福沢は勝の江戸城無血開城を非としたが、それは国内のことについて「殉節の気概」なきものは、対外国のことにおいても同様であろうと危ぶんだからであった、と述べていた。(11) 福沢の愛国論は、はやくも昭和初年の小泉に引き継がれていたのである。(12) かくして、小泉は福沢に「覚醒」した。

三　愛国者・個人主義者

昭和九年には「愛国者・個人主義者」、と題する講演録のなかで、「個人の人格を尊重し、個人の権威と責任とを強調するものが個人主義であるとするならば福沢先生の主義もたしかに個人主義である」と述べ、同時に、福沢は西郷隆盛を高く評価しており、両者ともに「熱烈なる愛国者」であったと指摘している。福沢は「西洋文明

の讃美者と云ふ風に見られてゐますけれども、事柄は決してさう簡単でない」として、国の独立をいかにして達成するか、そのためにぜひとも国家を文明の世界に進めるより仕方がない、と説いたという。なぜ、日本国は大切であるか。それは「非合理主義」「イルラシヨナル」に基づかなければ説明できない。計算や打算、損得をもって考えることのできないもの、それが「イルラシヨナリズム」である、と小泉は説明し、そこで福沢が「瘠我慢の説」で用いたのが、立国は私なり公に非らざるなり、という冒頭の一句であったとする。学問で説明はできないけれども、熱烈なる愛国者であった福沢は、ある種の「哲学」を捨て、「私情」に殉じるものであると説いた。福沢において個人主義と愛国主義とは両立するものであった。(13)

同年に発表した「福沢先生の国家及び社会観」においても、「先生は、つまり愛国心とか、報国心とかいうものは、これは哲学の上から見れば、天地の公道ではなくして私情に過ぎないものである。……しかしたとい私情に過ぎないとしても、吾々にとっては最高の道徳である。よし哲学的には説明出来ずとも、自分は敢えてその私情に殉ずる、ということを度々の機会において公言せられる」と述べ、「国民をして真実に国を愛せしむるためには、その国を彼等自身の国にしなければならぬ。自分の国としてこれを愛せしめなければならぬ」と強調している。ここでも、個人主義者と評せられる福沢が「最も強く国家国民に対する義務ということを高唱した人である」ことを力説する小泉であった。(14)

この翌々年、福沢の著作中、何が最も得意な作品であったかと問うた小泉は、「瘠我慢の説」がその一つではないかと論じている。維新前後の勝と榎本の幕臣としての進退を論じ、新政府に出仕して立身したことを痛罵したこの一文を、「先生はこれを書いたあと、さぞ清々したことだろうと想像するのである」として、小泉は福沢を「熱烈な愛国者義憤者である」としている。これと好対照をなすのが後述の「旧藩情」で、社会事象の冷静な観察者としての福沢がよく現れているという。(15)

日中戦争前の時点で、小泉が福沢の「愛国心」や「殉節の気概」に着目していたことは、あらためて注目すべきであろう。もともと青年時代、君主や国家、忠義や愛国心といったものに否定的な感情をもっていた小泉だが、第一次世界大戦と福沢の影響を受けて「覚醒」し、その姿勢に変化をみせたのである。[16] 以後、福沢を国権論的立場から語る姿勢は、さらに強まっていくことになる。

四　戦時中の福沢弁護

日中戦争、太平洋戦争下の小泉が福沢を語るとき、とりわけこの国権論を強調した感がある。

昭和十二年十月に慶應義塾大学の学生に対して語った演説「忠烈なる我が将兵」においては、「日支両国は遂に戦った。……ただ今は諸君はこの学窓にあって、思いを潜めて書を読み、理を講じて、以って他日に備えよ。ただその間一日も忘るべからざるは、君国の大事と前線将兵の犠牲と労苦とを思うことである」と述べ、日清戦争の際に福沢が海軍大尉木村浩吉（福沢の恩人である木村喜毅の子）に宛てた書簡（「奮戦」を祈り、「討死」した場合は生涯をかけて両親を支えることを伝えたもの）を引用し、「先生の愛国の赤誠、旧恩人に対するその情誼、私は幾度かこの書簡を読んで落涙をとどめることが出来ぬ……福沢先生のこの心をもって心とせよ」と語った。[17]

『改造』昭和十二年十二月号に掲載された「日清戦争と福沢諭吉」では、福沢は日清戦争に先立つ二十年余り、「繰返し繰返し国権の皇張を唱え」ており、日清開戦にあたっては「自分がその責任者というくらいに感じていた」と指摘し、「その全生涯中、最大の歓喜は蓋し公事としては日清戦争の勝利であった」とする。福沢は朝鮮問題に深い関心を持ち、開化派を支援し、日清戦争においては軍資醵出に奔走し、世論の統一と軍民の士気の鼓舞に取り組んだ。福沢は、国の独立は目的であり、国民の文明はその目的に達する術であると説いたが、福沢の

生涯においてその努力は酬いられたであろうと小泉は指摘し、「半世紀の後の今日において我々もまた殆ど感慨に堪えないのである」と述べている。[18]

昆野和七が昭和十七年五月に発表した「昨秋以来の福沢論」によると、昭和十五年秋から翌年の初めにかけて、「福沢攻撃論」が世間でかなり評判になるようになり、これに応じて慶應義塾外の研究者が福沢の「国家主義者」「国権皇張論者」的側面を強調して福沢を弁護したという。[19]

小泉の姿勢も同様であった。太平洋戦争開戦翌年の「西洋列強の東攻と福沢諭吉」では、『文明論之概略』、『通俗国権論』、『時事小言』などの著書はいずれも、「国の独立の安危を思えと切言した」ものであったという。その独立を守るために、文明を進歩させ、軍備を増強せねばならない。西洋人は東洋人を同類のように見ず、西洋人が東洋諸国を犯すのはあたかも狩猟者の獲物を競うが如くである、と危機感を強調した。青年当時の福沢は、香港で英国人に支配される清国人をみて、日本人もいつかはインド人や中国人を支配し、さらに英国人をも支配し、東洋の権柄を一手に握りたいものだと願ったという。この福沢に太平洋戦争初期の香港陥落を伝えたら何と言うだろう、と福沢門下の先輩たちは皆その感を深くしたことであろう、と小泉は述べている。先述の通り、世間には福沢に対する反感があり、それを緩和するためにも、国権論的側面を強調する必要があったのであろう。小泉は、福沢が西洋学問の移入を訴えたことを受け、今日の我々は西洋学問の輸入段階から脱却し、「科学を真実わが国のもの」とし、わが土壌に生長させ、結実させ、西洋学問の水準を抜くという積年の宿題を解決すべきときである、とも語っている。[20]

戦争末期、昭和十九年三月には徳富蘇峰（言論報国会会長）が福沢批判を展開した。小泉はこれに反論している。

蘇峰は、福沢が薩長藩閥に対峙した態度を賞賛しつつ、「然し西洋のことを無茶苦茶に輸入する点に於ては伊

藤や陸奥なんかの比ぢやない。より以上のものである。彼は西洋のいいことを輸入するといふよりも、日本のことを悉く壊すといふ方針でやつて来た」と批判した。さらに福沢は「愛国者であつたと思ふが、議論だけは非常に困つた」として、功利主義を唱えて日本の「良風美俗」を破壊し、「独立自存（ママ）……要するに個人主義」に陥り、「独立自尊であるために例へば国家の大事でも自分に於ては何等頓着ない」と非難し、「独立自尊でやつて行く以上は愛国といふなどとは縁が遠くならざるを得ないような結果になって来た」と論じた[21]。

小泉はこれに対し、福沢が愛国者でありながら愛国論報国論を世に唱えなかったというのならば、として、『学問のすゝめ』以下、『時事新報』論説に至る膨大な資料を列挙し、福沢が一貫して「国権皇張論」を唱えたと主張した。福沢の心を日夜支配していたのは、西欧列強のアジア侵略であり、これに対していかに独立を守るか、ということであったとして、そのために文明化を追求したという。また小泉は、福沢は「西洋心酔者」に対して辛辣な冷罵を加えて世間を警めたことを挙げ、西洋盲信を嘲ったと反論している。小泉は、福沢門下の幾千の青壮年がいま、陸上、海上、空中で戦っている、彼らをも非愛国者だというのか、と反論した[22]。

蘇峰の批判は『言論報国』に掲載されたもので、小泉も言論報国会の会員であったため、同誌の上で反論しようと試みたところ、会の内部で論争が起こることを懸念した専務理事の鹿子木員信は、「特定の人々を指して今日公然斯る言辞を弄するは不穏当ならずや」といった一部を削除するよう小泉に求めた。小泉は頑として拒否し、『三田新聞』に掲載するに至ったものである。鹿子木宛の書簡で小泉はいう。「無用なる誹謗を同胞に加へ、其の忠良の怒りを招くが如きは、決して我会の為に取るべきところにあらず、国家も亦必ず喜ばざるならん[23]」。小泉は慶應義塾長として、筆を揮って、国家と義塾を守らなければならなかった[24]。

同年には「福沢諭吉先生と軍人援護」と題する小文を『公民講座』に発表し、前掲の日清戦争の際に福沢が海軍大尉木村浩吉に宛てた書簡を紹介して、「幕末以来欧米勢力の東亜侵略に対して国家の独立、国権の拡張を叫

びつゞけて来た先生は、明治十五年の朝鮮事変発生のあとは当然の帰結として陸海軍々備の大拡張論者として、常に民間輿論の指導に任じた……日清戦争を迎へた先生は時事新報の社説において殆ど連日筆をとって大概強硬論を吐露して休む事のなかつたことは世間周知の事実である」と述べ、福沢は戦争の目的は勝利にあるとして、戦争中は政争を中止し、軍資を醵出し、戦後においては兵士の恩典、出征軍人遺家族の扶助方法について輿論に訴え、戦死者の大祭典を執行すべきことを説き、戦死者の贈位などについて論じたという。この小文は、福沢が明治天皇に戦死者の大祭典を祭主となって挙行することを求め、靖国神社の祭典でそれが実現したことで「先生は聖恩に感泣したのであつた」と結ばれている。[25]

五　占領下の福沢論

占領下において占領軍が民主化政策を進めるなか、福沢は自由主義者として、民主主義者として、女性擁護論者として、「復権」した。その大要については拙著においてすでに論じたところであるが、[26] 当時、その様子を目の当たりにした丸山眞男は、「今次の惨憺たる敗戦によつて、日本の維新以来歩み来たつたいはゆる「近代化」の道程がいかに歪曲されたものかであつたかが白日のもとに曝され、ひとびとが近代的自由を初歩から改めて学び取ることの必要を痛切に意識するに及んで、福沢諭吉はさきごろまでの汚名であつた自由主義者乃至個人主義的功利主義者という資格に於て、いままた舞台に呼び戻されようとするかの如くである」と、この現象を描写している。丸山はかかる現象を「ひとびとは、日本の社会的病理現象に対する彼の具体的な批判の適格さと華麗さに目を奪はれて、深くその批判の底に流れる思惟方法に注意を向けようとしない」と批判的に捉えて、「基礎的な思惟方法の分析」に挑んだ。[27]

福沢の「復権」に大きな役割を果たした羽仁五郎は、昭和二十一年一月の『中央公論』復刊号において、「福沢諭吉―人と思想の研究」と題する論文を発表し、「今度の戦時中、慶應義塾總長小泉信三博士が、福沢の「国権論」を力説されたのは、皇室中心軍国主義者たちの狂暴に対し、陸軍士官学校あたりが何人の執筆したものか教科書に福沢諭吉の自由主義に対する攻撃をのせて居たりした脅迫的空気に対し、慶應義塾をまもるための死闘中の一戦術として、充分諒解敬意を表せられねばならなかつた」と一定の理解を示しつつ、小泉が、『福翁自伝』中で日清戦争の勝利に福沢が感激した一節を引用し、これを福沢にとって一生を通じての最大歓喜と評したことについては、「福沢諭吉に対する正しい評価であつたろうか」と疑問を呈し、「人の言行なかんづく思想家学者の苦心に成る思想的学問的業績は、その人が健康にして力にみちて生活し活動し思索し発表したところによつて聴くべく見るべく判断すべきではなかろうか」と反論した。(28)

こうした批判を受けてか、小泉は占領下にあって、それまでの愛国的・国権的な福沢論を変化させた。たとえば、昭和二十三年六月、『新潮』誌上において、『学問のすゝめ』は「日本人の最も痛切なる現実の必要に応じた、また読んでも面白い本になつた」と評し、「愚民の上に苛き政府あり」、「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」、「天理に戻ることを唱る者は孟子にても孔子にても遠慮に及ばず、これを罪人と云て可なり」といった節を引きながら、「何れも皆な日本今日の時弊に当るものである」と述べている。小泉は、「福沢の言論がいかに孔孟尊崇の人を激したか」について、今日のマルクスまたはマルクシズムに対する批判者に対するマルクス尊崇者の立腹から察する事が出来る、と自らの体験を交えて解説する。福沢は旺盛な批判的精神をもって、猛烈な筆鋒で「漢儒の惑溺」を攻撃し、「開化先生」の「西洋心酔」を戒めた。また福沢は、「怨望」を取り上げ、それが猜疑、嫉妬、恐怖、卑怯、私語、密話、内談、秘計、徒党、暗殺、一揆内乱などにつながっていくと述べ、「怨望」の原因は、人の言動・行動を制約する「唯窮の一事」にあるとしたが、それは自由な発言と行動をも求める

ことになった。小泉は、福沢の思想を伝える「比類なき雄弁」かつ「ユーモア」のある文章をして、『学問のすゝめ』の今日的意義を強調した。[29]

福沢の新聞論についても小泉は論じている。福沢の新聞編集の方針は、その人の前ではいえないことを、蔭に回って新聞には書く、いわゆる蔭弁慶を戒めたことである。こうした方針の下でも、記者が過失を犯すことはあった。その際はその過失を重大視し、誠実鄭重に陳謝する用意を持っていた。記事を取り消す際に、その一・五倍の分量をもって掲載した、ということもあった。こうした精神は省みられなければならない、と小泉は説く。[30]小泉は、こうした精神が現在守られていないとして、「この福沢の、フェア・プレイの戒めは、今日守られてゐない。面と向かってその人には、とても言へないやうな悪口雑言が、書き散らされてゐる。その一々の実例は姑く引かないが、殊に近来当局政治家に対する人身攻撃には、実際読むに堪えないものがあった」と苦言を呈している。[31]

小泉は昭和二十四年に東宮御教育常時参与に就任する。小泉は当時、「帝室論は帝国憲法もまだできなかった、明治十五年のものですが、天皇の職分については、大体現行憲法と同じ精神のことを説いています」[32]と、日本国憲法と『帝室論』が相通じるものであると判断して、これを明仁皇太子とともに代わる代わる音読した。[33]かつて『帝室論』は、昭和十二年、富田正文・宮崎友愛共編の『福沢文選』に収めて慶應義塾大学予科の参考書にしようとしたところ、文部省から適当でないとの注意があり、削除されたといわれている。[34]こうした事情もあり、小泉は昭和八年に塾長に就任して以来、敗戦まで『帝室論』について触れることがなかったが、それは当時の政治状況から見て反発を受けるという政治的判断があったためだと瀬畑源氏は指摘している。[35]

六　戦後の福沢論

もし、福沢諭吉が生きていたら、どういうことを説いたであろうか、と小泉はよく聞かれたという。これに対する一つの回答として、昭和三十一年にＮＨＫで「福沢先生が今おられたら」という講話をしている。福沢は「中道」をもって旨とし、世間が右に向かいそうであれば左へ、左に向かいそうになれば右へ、と、しばしば極端な言説をもって誘導しようとした。日清戦争に際しては熱心にこれを支援したにもかかわらず、戦後は国民の戦争熱を心配したのも、その一例である。福沢は、法と秩序を重んじ、「秩序ある進歩」を目指し、未来における人智の進歩というものに無限の信頼を寄せた。(36) 秩序ある進歩、は小泉が好んで使った言葉であり、日清戦争における福沢の言説の評価についても、戦前とは大きく変貌していることが確認できる。

「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」という『学問のすゝめ』の一節も、小泉が好んで引用したものであった。独立の心のないものは自分を自国の主人と思わず、「客分」のような気持ちになる。一旦外国との戦争になったら、我々は「客分」だから命を棄てるのは分に過ぎたことだとして、逃げ走ることになろうが、それでは一国の独立は危うい。また独立の気力なきものは必ず人に依頼し、人を恐れ、人にへつらう。スターリンの生前、これを賛美することに忙しかった人々が、フルシチョフ等のスターリン批判が伝わるとスターリン批判の筆を試みはじめた。福沢の言が今日今更のように思われる、と小泉は指摘する。(37)

昭和二十二年、小泉は『福沢諭吉の歴史観』と題する著書を常松書店から出版し、のちに訂正を加えた上で小冊子とし、再度刊行した。それが『新文明』（昭和三十七年十一月）に附録として掲載されている。福沢は、自然科学への関心から科学主義の立場を取り、社会人事にも法則の支配があることを知った。歴史についてはどうか。小泉は、「歴史を単に恣意と偶然とのみが支配するところと観ることを肯じないこと」に福沢はたどりついたの

ではないか、とみる。

福沢が『文明論之概略』において、大きな影響を受けたのがヘンリー・トーマス・バックル（Henry Thomas Buckle）の『英国文明史』であった。歴史を法則科学の観点から論じた当時のベストセラーで、特に統計の方法によって文明進歩の法則を打ち立てることを期した著作である。

福沢はその統計法についてバックルの名を挙げてその説を引用し、一年のうち晴れは雨より多いことを知るように、一身一家についても、一国単位でみれば、一定の規則を見いだすことができるという。治乱興廃も二、三人の動静によって定まるものではなく、「時勢」、すなわちその時代の人民に分与された智徳の有様によって定まる。政治家と時勢とは航海者と汽船の関係のようなものであって、航海者は汽船の運転作用を担うに過ぎないという。

福沢の歴史観を考える上で、小泉が特に着目したのが明治十年の「旧藩情」と十二年の『民情一新』である。[38] 前者で福沢は、旧中津藩を例に、武士の間に身分格差が存在していたことを克明に記した。階級闘争的歴史観の普及していない当時にあって、この点に着目したのは「非凡な着眼と称すべきであろう」と小泉はいう。『民情一新』では、蒸気、電信、印刷、郵便の発明によって「民情」が「一新」すると述べたが、この「民情」こそが「時勢」であった。福沢はマルクスについて知らなかったが、社会一切の歴史は階級闘争の歴史であるといい、蒸気の発明は工業資本家を有する社会を生ずるといったマルクスと通じるところがあった。しかし、福沢にはマルクスのような形而上学的語気が全く欠けており、実証的、地上的であった。[39]

戦前の愛国主義的福沢論とは打って変わって、自らの専門であるマルクス主義批判の観点から、福沢を論じるようになっているのが特徴的である。戦後、小泉は再度福沢に「覚醒」することとなった。

七　むすびに代えて――『福沢諭吉』（岩波新書）――

小泉は生前、福沢諭吉に関する著作を何冊か出しているが、最も広く読まれたのが、小泉の最後の著書となった『福沢諭吉』（岩波新書、昭和四十一年）である。この書の中でも、右の観点から見て特に重要なのが、第四章「福沢諭吉の歴史観」であろう。

前節と重複するところがあるが、あえてその内容を紹介すると、まず、福沢の思想家としての第一の事業は、科学主義の確立と国民独立の精神の鼓吹とにあったとする。そのために、社会的事物を考察するにあたり、あるがままの実相を直視しようとし、歴史的変動に、できれば法則を求めようとした。社会学、史学の領域において重要なのは『文明論之概略』、『民情一新』、「旧藩情」であるという。

福沢は緒方洪庵の適塾で自然科学を身につけ、科学的精神に疎い儒者を嫌った。さらに三度の洋行を経て、その視野は西洋の人文科学にまで広がっていく。そして、自然世界を支配する法則があることに驚いた福沢は、社会人事もまた法則の支配を受けるという主張に接し、その魅力に惹かれた。歴史もまた、単に恣意と偶然とによって支配されるものではなく、「世の体勢」、先述の「時勢」によって支配されるとみた。政治家や軍人の事功を伝えることに忙しかった従来の歴史は、不満足この上ないものであった。

「旧藩情」の今日的意義として、小泉は、旧藩士族そのものの間における階級的対立の事実を指摘したことであるとする。同書で福沢は、旧中津藩の上士と下士との間に動かしがたい格差が存在したと説いたが、階級闘争的歴史観の影響のないこの時代にこうした視点を持ち得たことの価値を、小泉は高く評価した。蒸気、電信、印刷、郵便の普及が「民情」を「一新」させると説いた『民情一新』は、まさに歴史を動かす「時勢」、すなわち「民情」の趨勢を説いたものであった。「民情」が「一新」されると、革新的世論が活性化し、政治的、社会的不

安が呼び起こされるという。蒸気、電信等のもたらす社会問題まで見通していた点が、先覚者の着眼というべきであろう、と小泉は評価する。[40]

小泉は、自らのマルクス批判について、「その憎悪の鼓吹」を嫌うと強調している。一部のマルクシストが階級間の憎悪を煽り、相互理解と寛容を嫌う風潮に、「マルクシズムに孕まれるマキアヴェリズムの危険」を読み取る小泉は、こうした要素と「人間尊重の精神」とは相容れないとし、小泉は、この「人間尊重の精神」を「誰れよりも先ず福沢先生に教えられた」とする。[41]

マルクスの階級闘争史観への着眼や、マルクス批判は、小泉にとって研究者としての原点にも相当するものであった。戦後になって福沢を読み返した小泉は、そこにマルクス批判の先駆者としての福沢を読み取り、まさに「青い鳥」を発見したのである。その鳥は、『帝室論』や「秩序ある進歩」、といった、小泉の信じる戦後日本の指針をも運んできた。そこに、神沢氏の指摘するような、マルクス主義に対する思想界の評価が戦前から逆転しているという時代状況が影響していたことは、あらためていうまでもあるまい。ただ、戦前の小泉もまた、非常時局下において慶應義塾を防衛すべく、福沢の国権論や「愛国心」に「青い鳥」を見いだしていたことも忘れてはなるまい。[42] それは小泉が信じた、戦前日本の指針ともいうべきものであった。二羽の「青い鳥」の間には、単に力点の変化を越えた、福沢解釈の地殻の変動をみてとることができるといえよう。

（1）「『福沢諭吉伝』と『続福沢全集』」（『小泉信三書簡　岩波茂雄・小林勇宛全一〇四点』慶應義塾福沢研究センター、平成二二年）、一六〇頁。

（2）前掲『小泉信三書簡　岩波茂雄・小林勇宛全一〇四点』、七頁。岩波と石河の面会、これへの小泉の関わりについては、竹田行之「〔覚書〕岩波茂雄、小泉信三、富田正文、小林勇―福沢著作の編纂・出版を中心に」（『福沢諭吉

年鑑』三三、平成一八年）、一〇九頁、参照。

（3）服部禮次郎「小泉信三博士没後四〇年―小泉信三博士と福沢研究」（服部禮次郎『福沢諭吉と門下生たち』慶應義塾大学出版会、平成二一年）、一〇三―一〇四頁。

（4）小泉信三「青い鳥」（『小泉信三全集』第二六巻、文藝春秋、昭和四四年）、八七―九六頁。初出は『三田文学』昭和一九年四月―八月。小泉が福沢の著作に着眼するのは遅かったが、小泉自身、幼少期に福沢宅に同居し、福沢と直接接する機会があった。のちに、もし自分が青年期に福沢と直接接することができたならば、と後悔することになる。詳しくは、拙著『小泉信三―天皇の師として、自由主義者として』（中公新書、平成三〇年）、一一―一三頁、参照。福沢との思い出、および「青い鳥」に関しては、楠茂樹・楠美佐子『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』（ミネルヴァ書房、平成二九年）、二〇―二一、一〇三―一〇五頁、楠茂樹「小泉信三論のための二つの視点」（『近代日本研究』第三三巻、平成二九年二月）、三三―三四頁、楠茂樹・楠美佐子「小泉信三研究の魅力と課題」（『ソフィア』第六一巻四号、平成二四年三月）、二八三頁、小泉信三『小泉信三エッセイ選　2　私と福沢諭吉』（慶應義塾大学出版会、平成二九年）、所収のエッセイも参照のこと。

（5）前掲「小泉信三博士没後四〇年―小泉信三博士と福沢研究」、一〇六―一〇七頁。

（6）神沢惣一郎「福沢諭吉と小泉信三」（『早稲田商学』第二〇九号、昭和四四年六月）、一二五頁。

（7）前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、一―五頁。

（8）前掲「小泉信三博士没後四〇年―小泉信三博士と福沢研究」、一〇四頁。

（9）小泉信三「『福沢選集』解説」（『小泉信三全集』第二一巻、文藝春秋、昭和四三年）、三八七―三九三頁。初出は小泉信三編『福沢選集』（岩波文庫、昭和三年）。小泉は大正一四年から一五年にかけての『福沢全集』刊行に際して解説を書いているが、あくまで句読点等の表現法についてであり、福沢についての意識を先鋭化させるきっかけとなったのは『福沢選集』の出版で、小泉はその「解説」を手がけ、これに合わせて「瘠我慢の説と栗本鋤雲」と題する講演も試みた（注(11)、および前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、一一―三、七九―八〇頁）。

（10）小泉信三「福沢諭吉伝」（『小泉信三全集』第一二巻、文藝春秋、昭和四二年）、一五―七〇頁。初出は『中央公論』昭和六年七月、『改造』昭和七年二月。

(11) 小泉信三「福沢先生の瘠我慢」(『文藝春秋』昭和三年二月)、九七―一〇二頁。この論考については、前掲「小泉信三論のための二つの視点」、二六頁も参照。小泉は昭和三年一月一〇日に福沢先生記念会で「瘠我慢の説と栗本鋤雲」と題する講演を行い、『三田評論』(同年三月号)に掲載されている(前掲『小泉信三全集』第二一巻、三四一―三五六、四九二頁)。本講演については、前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、八〇頁、今村武雄『小泉信三伝』(文藝春秋、昭和五八年)、五七五―五七八頁、も参照。

(12) 前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、八〇頁。

(13) 小泉信三「愛国者・個人主義者」(『公民講座』第一二〇号、昭和九年)、四―一三頁。

(14) 小泉信三「福沢先生の国家及び社会観」(前掲『小泉信三全集』第二一巻)、三五七―三七一頁。初出は『史学』(昭和九年一一月)。この論考については、前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、八一―九一頁、前掲「小泉信三論のための二つの視点」、二七―三〇頁、も参照。

(15) 小泉信三「福沢先生の著作について」(『小泉信三全集』第一三巻、文藝春秋、昭和四三年)、三八―四四頁。初出は『学窓雑記』(岩波書店、昭和一一年)。同書で小泉は、『西洋事情』と『学問のすゝめ』について、「今日の一般の読者」に向かってこれは薦められないと述べている(同前、三八頁)。楠茂樹氏・楠美佐子氏は、それは日本の独立が達成されたからであり、当時の小泉は「西洋」より「出自」に忠実であれという福沢に学ぼうとしていたという(前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、八一―八二頁)。筆者もこれに賛同するものである。

(16) 武藤秀太郎『大正デモクラットの精神史―東アジアにおける「知識人」の誕生』(慶應義塾大学出版会、令和二年〈二〇二〇〉)、二二五―二五四頁。

(17) 小泉信三「忠烈なる我が将兵―昭和一二年十月中屢々学生の会同に臨みて告げし言葉」(前掲『小泉信三全集』第一三巻)、三八一―三八五頁。初出は『学生に与う』(三田文学出版部、昭和一六年)。

(18) 小泉信三「日清戦争と福沢諭吉」(前掲『小泉信三全集』第一三巻)、三九〇―四二〇頁。初出は『改造』昭和一二年一二月。この点については、前掲『小泉信三―天皇の師として、自由主義者として』、八一頁、も参照。

(19) 昆野和七「昨秋以来の福沢論―福沢諭吉関係文献紹介」(『三田評論』第五四三号、昭和一七年五月)、一六頁。この点に関しては、前掲『小泉信三―天皇の師として、自由主義者として』、八六頁、も参照。

(20) 小泉信三「西洋列強の東攻と福沢諭吉」（前掲『小泉信三全集』第一二巻）、二三一―二五五頁。初出は『中央公論』昭和一七年三月。この論考については、前掲「福沢諭吉と小泉信三」、一二一―一二二頁、も参照。

(21) 徳富猪一郎「蘇翁漫談」（『言論報国』第二巻三号、昭和一九年三月）、六一―六二頁。蘇峰と言論報国会については、赤澤史朗『徳富蘇峰と大日本言論報国会』（山川出版社、平成二九年）、参照。

(22) 小泉信三「徳富蘇峯氏の福沢先生評論について―先生の国権論その他」（前掲『小泉信三全集』第二一巻）、三七二―三八六頁、初出は『三田新聞』昭和一九年五月一〇日。

(23) 富田正文「戦時の塾長として―徳富蘇峰との対決」（『泉』第一一号、昭和五一年一月）、九二―九六頁。

(24) 小泉は蘇峰の批判によほど承服しがたかったとみえ、昭和一九年五月三〇日付で蘇峰に書簡を送り、福沢についての『蘇峰漫談』の評論中に承服できかねる箇所があるため、所感を発表したので読んでほしいと述べ、「徳富蘇峯氏の福沢先生評論について―先生の国権論其他」が掲載された『三田新聞』を送付している（高野静子『蘇峰とその時代―よせられた書簡から』中央公論社、昭和六三年、二六四―二七三頁）。なお、蘇峰との論争については前掲『小泉信三―天皇の師として、自由主義者として』、八七―八八頁、前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、一〇五―一〇六頁、も参照。

(25) 小泉信三「福沢諭吉先生と軍人援護」（『公民講座』第二三三号、昭和一九年）、二二―二三頁。

(26) 小川原正道『福沢諭吉―「官」との闘い』（文藝春秋、平成二二年）、第五章、参照。

(27) 丸山眞男「福沢に於ける「実学」の転回―福沢諭吉の哲学研究序説」（『東洋文化研究』第三号、昭和二二年三月）、二―三頁。前掲『福沢諭吉―「官」との闘い』、一七一、二〇二―二〇三頁、も参照。

(28) 羽仁五郎「福沢諭吉―人と思想の研究」（『中央公論』第六一巻一号、昭和二一年一月号）、七六頁。前掲『福沢諭吉―「官」との闘い』、一七四―一七五頁、も参照。

(29) 小泉信三「学問のすゝめ」（『新潮』第四五巻六号、昭和二三年六月）、四八―五六頁。前掲『福沢諭吉―「官」との闘い』、一九一―一九二頁、も参照。この小泉のエッセイは加筆修正の上、後にアテネ文庫版『福沢諭吉』（弘文堂、昭和二三年）の第三章として収録されている（前掲『小泉信三全集』第二一巻）。なお、このアテネ文庫版では福沢が日本の独立に腐心したことは論じられているが、その国権論的側面は強調されていない。戦後の小泉の『学問

のすゝめ』への着目については、前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、三一一―三一三頁、前掲「小泉信三論のための二つの視点」、三四―三五頁、前掲「小泉信三研究の魅力と課題」、二八一―二八三頁、も参照。

(30) 小泉信三「福沢先生と新聞道徳」(『小泉信三全集』第一〇巻、文藝春秋、昭和四二年)、五〇二―五〇六頁。初出は『実業之世界』昭和二七年一月。

(31) 小泉信三「記者に対する福沢の戒め」(『読売新聞』昭和二九年一一月三日付朝刊)。

(32) 小泉信三「読者への手紙」(『小泉信三全集』第一六巻、文藝春秋、昭和四二年)、五一七頁。初出は『週刊新潮』昭和三一年五月一五日号。小泉による『帝室論』の解説については、以下を参照。小泉信三「福沢諭吉の帝室論」(『小泉信三全集』第一五巻、文藝春秋、昭和四二年)、一五六―一五八頁。初出は『時事新報』昭和二七年一月一日付。福沢の『帝室論』とその小泉の受容については、前掲『小泉信三―天皇の師として、自由主義者として』、一三七―一三九頁、前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、二二二―二三三頁、楠茂樹「戦後の思想空間の中での福沢諭吉、小泉信三―『帝室論』に触れながら」(『三田評論』第一二三三号、令和元年五月)、二七―三三頁、なども参照。

(33) 小泉信三「この頃の皇太子殿下」(前掲『小泉信三全集』第一六巻)、五二三―五二四頁。初出は『文藝春秋』昭和三四年一月。前掲『福沢諭吉―「官」との闘い』、二〇一頁、も参照。

(34) 富田正文「後記」(慶應義塾編『福沢諭吉全集』第五巻、岩波書店、昭和四五年)、六五四頁。前掲『福沢諭吉―「官」との闘い』、一五八頁、も参照。

(35) 瀬畑源「小泉信三の象徴天皇論―『帝室論』と『ジョージ五世伝』を中心として」(『一橋社会科学』第二号、平成一九年三月)、五〇頁。前掲『福沢諭吉―「官」との闘い』、一六四―一六五頁、も参照。

(36) 小泉信三「福沢先生が今おられたら」(『小泉信三全集』第一〇巻、文藝春秋、昭和四二年)、四九五―五〇一頁。初出はNHK第一放送、昭和三二年一一月二三日)。「秩序ある進歩」と福沢との関係については、前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、二二八頁、前掲「小泉信三論のための二つの視点」、三八頁、も参照。

(37) 小泉信三「独立の気力なき者は国を思ふこと深切ならず」(『実業の世界』第五五巻六号、昭和三三年六月)、一

八―一九頁。

(38) 「旧藩情」と『民情一新』の小泉にとっての重要性については、以下も参照。小泉信三「福沢と唯物史観」（前掲『小泉信三全集』第一六巻）、三八八―四〇九頁。初出は『文藝春秋』昭和三〇年一一月。

(39) 小泉信三「福沢諭吉の歴史観」（『小泉信三全集』第一九巻、文藝春秋、昭和四三年）、四八三―五二六頁。初出は『新文明』昭和三七年一一月。

(40) 小泉信三『福沢諭吉』（前掲『小泉信三全集』第二一巻）、二四七―二七八頁。初出は『福沢諭吉』（岩波新書、昭和四一年）。小泉は同書で、福沢が日清戦争の勝利を喜んだことに言及しているが、『福翁自伝』において、日清戦争などは何でもなく、「日本外交の序開き」に過ぎぬと述べていることに注目し、福沢は西洋列強の東侵に対して日本と東アジアの独立を守ることを企図していたと述べている（一八六頁）。また、国権を拡張し、軍備を増強することの必要を福沢が説いたことにも論及しているが、それも「西洋諸国民にたいするアジア諸国民の対抗であった」としている（二九一頁）。もとより、戦後においても小泉は福沢の「愛国心」を語らなかったわけではなく、『新潮』昭和二六年六月号に掲載された「福沢の歴史観と愛国論―『文明論之概略』について」では、『文明論之概略』にあらわれた、まず日本の国と人民とを存在させてこそ文明を語ることができる、という一節を引いて、「憂心忡々たる愛国者であった、福沢の面目がある」と述べている（小泉信三「福沢の歴史観と愛国論―『文明論之概略』について」前掲『小泉信三全集』第一〇巻、四一六頁）。また、『毎日新聞』昭和三六年一〇月一六日付に掲載された「愛国心」では、「独立の気力なきものは国を思ふこと深切ならず」との福沢の言を引きながら、「卑屈の民は真の愛国者たり得ない」として、この言葉は今日もなお少しも古くなっていないとしている。一方で、愛国心は無理に造り出すものではなく、狭隘で排他的なものとなるのは戒めねばならないとも説いており、そこには「戦争の教訓」ともいうべきものが感じられる（小泉信三「愛国心」前掲『小泉信三全集』第一九巻、一二―一五頁）。戦後、小泉が愛国心を福沢に寄せて語るとき、戦前とは一定の距離を置いていたように思われる。

(41) 小泉信三「福沢諭吉と共産主義」（『小泉信三全集』第一七巻、文藝春秋、昭和四三年）、三九―四二頁。初出は『産経時事』昭和三一年六月四日付。同様の主張は、以下でもみられる。小泉信三「福沢の先憂」（前掲『小泉信三全集』第一〇巻、三〇二―三〇七頁）。初出は『朝日新聞』昭和二六年一月一日号。小泉のマルクス批判への福沢の影

響については、前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、一三九―一四三、二五三―二五四頁、前掲「小泉信三論のための二つの視点」、三七―三八頁、も参照。

(42) 前掲『昭和思想史としての小泉信三―民主と保守の相克』、一〇二―一〇三頁。